

## 初代藤田清兵衛の環境

——名古屋市立博物館『学びの世界』展より——

### 一 はじめに

平成一一（一九九九）年は、寛永六（一六二九）年に初代の藤田清兵衛が尾張藩に抱えられて三七〇年になる年であったので、その記念の催しが多く行われた。ちょうどこの年の秋に名古屋市立博物館の特別展として『学びの系譜』展が行われた。これは奈良時代から近代に至る長い期間の、文字・算術から和歌・芸能に至るまで広い分野の「学び」に関わるものを総合的に展示したもので、非常に充実した内容であった。その展示の一つのコーナーに「芸道の学び」のコーナーがあり藤田流の笛が取り上げられ、藤田家よりも八点が出展された。同展の図録をもとにこれを挙げると以下のようになる。（一）内は展示番号）

〔87〕能楽笛方藤田流相伝関係資料 七件

①能管「瓦落」一管  
室町時代

飯塚 恵理人\*

付・慶長八年（一六〇三）近衛信尹添書 一通

②笛相伝系図 一卷

江戸時代 卷子装 縦一八・五糎

③笛稽古目録 一卷

江戸時代

寛永四年（一六二七）十二月十三日付

下川丹斎差出 藤田清兵衛宛

巻紙 縦一八・〇糎

④協能乃次第事 一卷

江戸時代 巻紙 縦一六・〇糎

⑤藤田清兵衛稽古の図 一幅

江戸時代後期

掛幅装 縦二九・一糎 横四二・三糎

⑥門人帳 一綴

江戸時代後期～昭和前期

嘉永五年（一八五二）～昭和二年（一九二七）

紙縫綴 縦一二・五糎 横三四・七糎

⑦天鈿女命画像 一幅

享保七年（一七二二） 楊汀画

掛幅装 縦一〇七・三糎 横三八・五糎

〔100〕 いろは狂歌

江戸時代 慶長十五年（一六一〇）

藤田三郎太夫筆 卷子装 縦一五・六糎

これらのうち②③については、以前拙稿において翻刻・紹介させて頂いた。〔100〕『いろは狂歌』は初代藤田清兵衛の育った環境を考える上で貴重である。また④『脇能乃次第事』は笛彦兵衛の伝を記したものと伝えられており、室町後期に遡る内容を持っている可能性が強い。本稿ではこの書名を『笛彦兵衛【切取不明】 兩人笛之書』とした。本稿ではこの二点を翻刻し、その内容について判明すること、初代清兵衛との関わりについて述べたい。

## 凡例

原文に忠実であることを心がけたが、読解の便を考え、以下の方針で校訂した。この凡例は『いろは狂歌』『笛彦兵衛【切取不明】 兩人笛之書』の両方に共通する。

- ・ 狂歌には配列順に歌番号を記した。
- ・ 濁点のない部分はそのままとした。
- ・ 私に句読点を付した。
- ・ 旧字・異体字は通行の字体に改めた。
- ・ 能の詞章の引用部分は「」に入れた。
- ・ 能の曲名の引用部分は《》に入れた。

## 二 『いろは狂歌』

この狂歌集は奥書に「慶長十五（一六一〇）閏二月日 藤田三郎太夫」と署名があり、近世初期に書かれたものである。狂歌がいろは順の四七首と末尾に追加二首を加え、計四九首となっている。藤田三郎太夫は、初代藤田清兵衛の親で、〔87〕②「笛相伝系図」の初代清兵衛の項に「親三郎太夫ハ播州住 生国ハ但州出石生れ 小出大和守郡代役三百石」と書かれている。初代清兵衛は、藤田六郎兵衛家に伝わる画像に「浄岳清休 但州出石産俗名藤田清兵衛平重政 延寶五（一六七七）丁巳曆九月八日 寿七拾六歳」とするから、慶長七（一六〇二）年に、但馬国出石で生まれたと考えられる。このように考えると、この『いろは狂歌』は清兵衛が満八歳の時に作成されたと言える。清兵衛自身が寺小屋に通っていたであろう時期に、その親である藤田三郎太夫が、寺小屋で習う「いろは」を歌の頭に置いて、子供への教訓を内容として詠んだ狂歌集であるので、清兵衛ゆかりの品として藤田家に伝来したものであろう。この狂歌集は大坂の寺小屋を見てその坊主に遣ったものとされているが、文脈から、必ずしも清兵衛が大坂の寺小屋に通ったと考える必要はないように思われる。当時の庶民道徳が伺われて興味深い資料であり、また初代藤田清兵衛の親の教養や教育への考え方が伺われる貴重な資料である。

### 〔翻刻〕

### （前文）

大坂にて、手習子をあまた取て被置所へ行て見るに、坊主の留守に

なれハ、少も手習をハせすして、戸しやうしを打やふり、いさかひをし、くるふはかりなり。さてく親くハ物をならふと思ひて、すミ・紙をとゝのへ、坊主へハ色々草つとをも可被遣に、扱もくむけなる事と思ひて、狂哥をよみて坊主へ遣しける。

(狂歌)

- (1) いろくの芸能おほき其中に  
物かくほとのでうほうハなし
- (2) ろしをしていたかなかほをする人も  
もんまうなるハしれるそくしやう
- (3) はつかしや人中にてのさうたんに  
かたこといふハもんまうのゆへ
- (4) にあわぬハちこやわかしゆのちきたくミ  
あきないくちによくふかき事
- (5) ほしいまゝしるさいあまたくひちらし  
ちやのこをあらす人ハみくるし
- (6) へりくたりあしき子共とちかつきて  
いやしき事にすけるかなしき
- (7) としやうしやひやうふたゝミにすミ付て  
用にもたゝぬぎりきさミ事
- (8) ちハくとうそましりに物いひて  
あたふかきハいさかひのもと
- (9) りこんたてじちんいたかに人せゝり  
これそたわけのめいを打なる
- (10) ぬしのある女に心くれハとり  
あやしやしりをきられんそうき
- (11) るりをのへ玉をみかける女はうも

- (12) 人のめならハしやしんそと見よ  
をとなくあるへきのふハおさなくて  
せいしんするハ四つのもしかな
- (13) わするなよミかく文字のかすくに  
子をおもふ親のふかきなぎけを
- (14) かミゆわすやうしつかハすうかいせず  
手足のつめハきるとしもなし
- (15) よの中の人のすかたハかはらねと  
心からにそよしあしのある
- (16) たんきなも氣村なもたゝ氣すいゆへ  
しうのまへにてすいきやうハせず
- (17) れきくの親の名までもくたすこそ  
たゝ子こゝろのあしきゆへなれ
- (18) それくのくらゐくに身を持て  
へりもくたらすいたかをもすな
- (19) つねにたゝならひし事をふくせねハ  
ねさめかほなるみしか夜のゆめ
- (20) ねんころに師をうやまひて物をとへ  
ならひきハめぬけいハあやうし
- (21) なさけなや親にハ心つくさせて  
いたつらに日をおくるへきかハ
- (22) らくく親にかゝれる其うちに  
ならハぬのふハいつかつくへき
- (23) むつかしと萬のけいを打なくり  
老ての後ハくゆるかいなし
- (24) うたをよミ詩を作るこそかたからめ

- たゝ大かたの人にまけめや  
(25) ゐとけなき時より見ゆるよしあしに  
なにはの事そおもひやらるゝ  
(26) のふなしのくせなりけりな出入の  
人のへうなんいふそおかしき  
(27) おかしくもあらぬ事をはなんしつゝ  
せゝらわらひをするうつけもの  
(28) くるふとも人をいためついためられ  
そんなる事のあたはしすな  
(29) やりをつぎふへんをするもいやなれと  
きりをおもへハ命をもすつ  
(30) まれにしも人と生れて有なから  
犬ちくしやうといはるへきかは  
(31) けをふいてくわたいのきすをもとめんと  
りくつかましく物ハいはしな  
(32) ふせうなる事ハさまゝおほけれと  
かんにんするそ世のならひなる  
(33) こゝかしこゑの庭鳥おひまハリ  
いしやうをやふり身をなよこしそ  
(34) えしらいてとふハひけにもならざるを  
しつたかほしてはちをこそかけ  
(35) てからにもならぬ物からむしけらや  
てうとんはうを打なころしそ  
(36) あたに日をおくるはかりに年たけて  
物をかゝねハかうひんをかく  
(37) さまゝのあしき事にハ近付て  
  
よミかく事にとをき諸人  
(38) きんゝはつくるならひの有ぬれと  
身のけいのふハくつる事なし  
(39) ゆく道もすくにハゆかてみせたなを  
のそきまハるハ見くるしきかな  
(40) めにかゝる物ことにたゝほしかりて  
むしんの所望むやく成けり  
(41) みし事も聞たることもちハゝくと  
いひて何せん人のよしあし  
(42) しなゝの人の心をよく見しり  
それゝに氣つかふへきかな  
(43) ゑきもなき事をあらそひがを立て  
物からかひそよしなかりける  
(44) ひか事をわか理にせんとおもへとも  
身ハふりおけといはれさりけり  
(45) ものいふと座敷の躰を見合て  
きんゝにあわぬさうたんをすな  
(46) せかゝとしかるとハかりおもひ子の  
らうけやいとゝしらぬはかなさ  
(47) すミ紙の入ハいとハしならさかや  
子の手かよくハとにもかくにも  
(48) 京にすミゝる中に住も人ハたゝ  
心をうつせ花のミやこに  
(49) 一二三四五六七八九十  
百千万に氣を遣ふへし

慶長拾五（一六一〇）閏二月日 藤田三郎太夫

### 三 『笛彦兵衛』【切取不明】 両人笛之書

名古屋市立博物館の図録で〔87〕④『脇能乃次第事』として載る伝書である。この伝書は、前から四分の三程度が『高砂』の演奏技法に関する記事であり、後の四分の一が『江口』『吉野静』『軒端梅』の笛の演奏技法に関する記事である。『高砂』に関する記事が終わった部分に「右脇能の吹様如此秘事候。努々物語にも不可有候。」とあるから、『高砂』に関する部分が相伝の中心部分であると考えてよいだろう。

名古屋市立博物館の展示の際、この書名を『脇能乃次第事』と冒頭の言葉をとれば良いと担当の方に述べたのは私だが、これは私の誤りであり、訂正させて頂きたい。この書は脇能の次第に関する記述のみではなく、他の記事を含んでいるからである。表紙には「笛彦兵衛【切取不明】 両人笛之書也」と、笛彦兵衛ともう一人の「両人」の笛伝書であると記されている。もう一人の名前が書かれていたと考えられる部分は切り取られて欠けており、確認することは出来ない。但し、この伝書は一筆であり、「両人」の伝書とするのは不審である。また奥書を欠いている。この伝書は、笛彦兵衛の伝書の途中までが残った形で、元は笛彦兵衛以外のもう一人の伝書が続いていたのだが、それが失われていると考えるのが自然であろう。後の部分が失われた後、実態にあわせる形で表紙の「笛彦兵衛」以外の人物の名を切り取ったものと考えられる。

藤田家には大永四（一五二四）年に笛彦兵衛が馬淵美作守に送つ

た『笛之拔書』が伝来している。この『笛之拔書』が笛の技法の要所を書簡で送ったものであるのと同様、この伝書も『高砂』を中心とする笛の技法について書簡として渡されたものである可能性が強い。室町時代後期から近世初期には師匠がまとめた教材を弟子に渡すことはあまりなく、曲を教授する都度、その技法や注意点などを書簡の形式で弟子に渡し、弟子はそれを書き貯めて、それを子孫に渡すと言うのが一般的なあり方であつたと考えられる。師匠にしても、少しづつ教える度に若干の教授料を得ることが出来たであろうから、その方がまとまって相伝するよりも生活の安定のためには良かったであろう。この書が『笛之拔書』と同筆であるかの判断は私には出来ないが、いずれにせよ室町時代後期に遡る可能性がある笛伝書であり、笛の技法を考える上で貴重な資料である。また、このような伝書を持つことが、自分が正統な伝授を受けているという証明となつたのであり、それは初代清兵衛が禁裏の能に出勤する際や、尾張藩に抱えられる上で、必要欠くべからざる事項であつたと考えられる。

#### 【翻刻】

（表紙）

笛彦兵衛【切取不明】 両人笛之書也

（本文）

一 脇能の次第の事。鼓かゝりたるをみあはせて、ひとつとふきかけ  
てより、いつもの程に高音をゆうくといかにも祝言に吹へき  
也。さて脇いて、したひをうたひ候ハ、中にて吹納て待へし。  
一 「いまをはしめの旅衣く、日も行す急そ久しき。」ゆふくくと  
ゆり。

- 一 「すゑはる／＼の都路を／＼。」中高音。  
 一 「いくかきぬらん跡すゑの」にて高音。  
 一 「高砂の浦に付にけり／＼。」六下。  
 一 脇せりふまで、ゆふ／＼と吹のハするなり  
 一 一声の笛に四日の勸進にたゝ一度ならてハ吹ぬ手あり。是口傳也。いつれの一声の内にも候へ、なかし又ハこしのうちにても候へ、吹候ハぬ物にて候。其心得ハ鼓を能く人にきかせんとの事也。同大鼓の手を打候ハん時も其心得也。  
 一 「尾上の鐘も響なり。」下無調より吹なり。  
 一 「音こそ塩の満干なれ。」中高音一つ。又吹かへす。  
 一 「思ひをのふる斗也。」呂をゆふ／＼と。後のうたひにて色に吹納なり。  
 一 「木陰のちりをかゝふ／＼。」又初中返てふく。  
 一 「なるまで命なからへて」中高音一つ。  
 一 「それも久しき名所哉。」高音一つ吹て、六下納也。脇詞いひ出すまで吹なり。  
 一 詞の内に「松もろともに此年まで」と云に、呂の色を吹なり。  
 一 「四海浪しつかにて」吹へからず。  
 一 「松こそ目出かりけり。」高音ひしき一つ。  
 一 「すめる民とてゆたかなる。」にて高音一つ吹納なり。  
 一 「なを／＼高砂のいはれ御物語候へ。」と云より本の音とりをゆふ／＼と吹。同此内大鼓よりかしらを打出し、くりの内にて中の高音まで吹、まち候也。  
 一 「南枝花」より吹かけ、高音にて吹て、次のゆりをうたひのゆりにあはせ候様に吹へき也。  
 一 「敷島のかげによるとかや。」にて六下を曲舞にてゆふ／＼と。
- 一 曲舞に「みな和哥のすかたならすや。」にて、中高音一つ吹て、さうの六下吹へし。  
 一 「異国にも本朝にも万民これを賞翫す。」にて、同手なり。  
 一 「立よる影ハ朝夕」にて、高音ひしき一つ。  
 一 「中にも名ハ高砂」にて、中高音、さうの六下へ吹へし。  
 一 論儀も中「海士の小舟にうちのかけて、六下へ吹へし。  
 一 「おきの方にに出にけりや／＼。」ゆふ／＼とゆりを吹へし。きやうけんいてさる間ハねとり吹なり。  
 一 狂言物語する時分を見つくるひて、そと音とりにて、さてあひのうたひをうたはせ候様に吹へき也。  
 一 間のうたひ「此浦舟に帆をあけて」とうたふ所にて、高音のひしき一つ。  
 一 「はやすみの江に付にけり。」にてはねて一つ六下と吹、ひとつ吹へし。  
 一 一声大鼓の内、前の一声笛にかさねて。かんせ一つ有。くたりハ同前也。  
 一 出庭に「夜の鼓の拍子をそろへて 涼しめたまへ宮つこたち。」にて呂のたれなり。  
 一 「二月の雪衣に落。」とうたふより舞吹いたす。一段めにて手吹へからず。二段目にをろす手定りたり。此手の吹かゝり様ハのるへからず。又のらぬにもあらず。惣別笛になまる事を嫌といへとも、いつれも神舞の吹様ハなまり候様に吹へき也。此心得各別なり。一段舞はやし。  
 一 「千秋楽ハ民を撫」より、高音のひしき。又はね手一つ。  
 一 「さつ／＼のこゑそたのしむ。」にて笛の吹上なり。さてのひ／＼と、ひとつと吹なり。

右脇能の吹様如此秘事候。努々物語にも不可有候。以此口傳餘々能を似たる様に吹たる事候。暮く此心得萬端諸事ニ可渡候。穴賢々々。

一 序の吹出可有三段。《江口》の序ハ「面白や。」とうたふ。かんの和哥也。同序の吹出かんの平調かへしより吹いたすへき也。しんの序なり。

一 《軒端梅》の序ハ「春の夜の」とうたふ中の和哥也。中より吹いたすへし。

一 《吉野静》の序ハ「しつやく」とうたふ下より和哥なり。同序下より可吹出。何も序の吹様如此等に似たる能ハ可為如此候。

一 舞の吹様の心得の事。舞になりて一段目ハさう。二段目より乗て、三段めにしつまる。四段目よりつまり、五段めハきう。

## 注

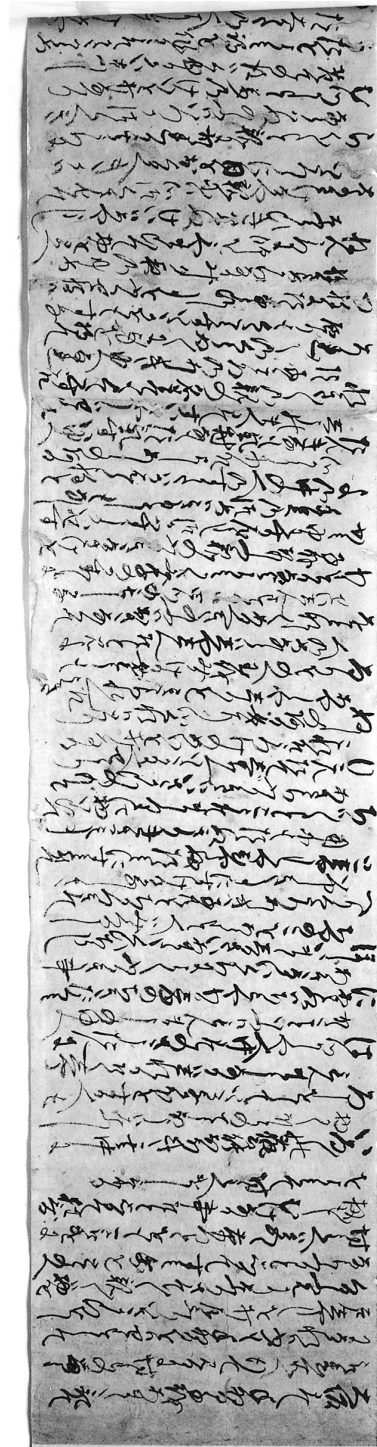
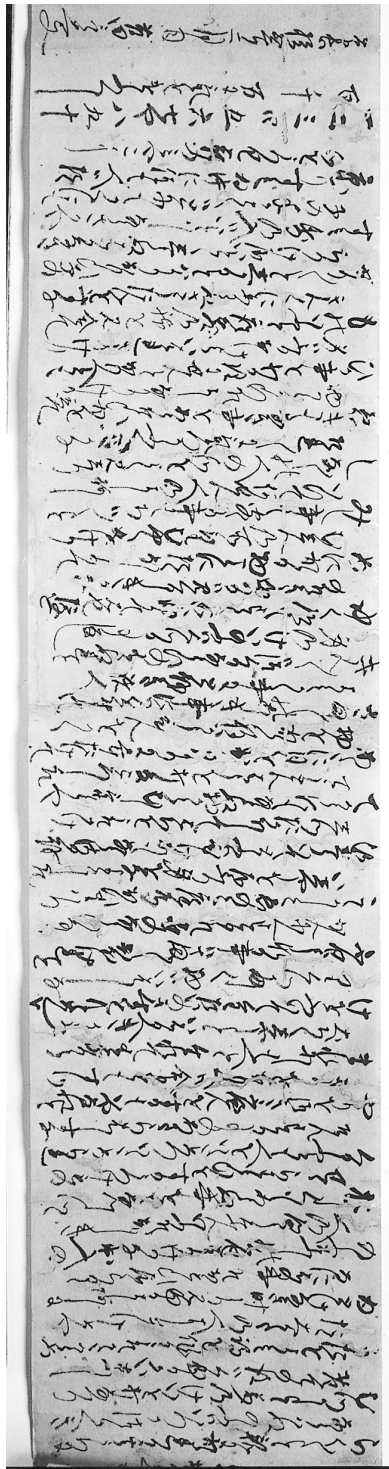
- (1) 『名古屋博物館特別展 学びの系譜』名古屋博物館編集・発行 平成一二年一〇月発行 (87) 六七—六九頁(100) 八二頁
- (2) 「初代藤田清兵衛の芸統——名古屋能楽堂特別展『藤田家伝来名品展』展覧資料から——」拙稿 『相山国文学』第二三号 平成一一年三月発行 ②『笛相伝系図』はここでは『血脈相承』という書名で、一三—一六頁に翻刻が載る。『笛相伝系図』とする方が内容にふさわしいので、今後は私もそのように呼びたい。また『笛槽古目録』は同名で、一二〇—一二四頁に翻刻が載る。
- (3) 注2 一二六頁

## 付記

貴重な資料の閲覧・翻刻を許可頂きました笛方藤田流十一代宗家藤田六郎兵衛師に心より感謝致します。本稿翻刻原稿作成に当たりまして貴重な御教示を頂きました栗花光弥氏、資料全般にわたりまして多くの御教示を頂きました名古屋博物館学芸員山本祐子氏に心より感謝致します。本稿は平成一六年度科学研究費助成 基盤研究(C)「近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化——東海地域を中心に——」(課題番号 12610457) による成果の一部となります。

\* 文化情報学部 文化情報学科







[illegible][illegible][illegible]

四三

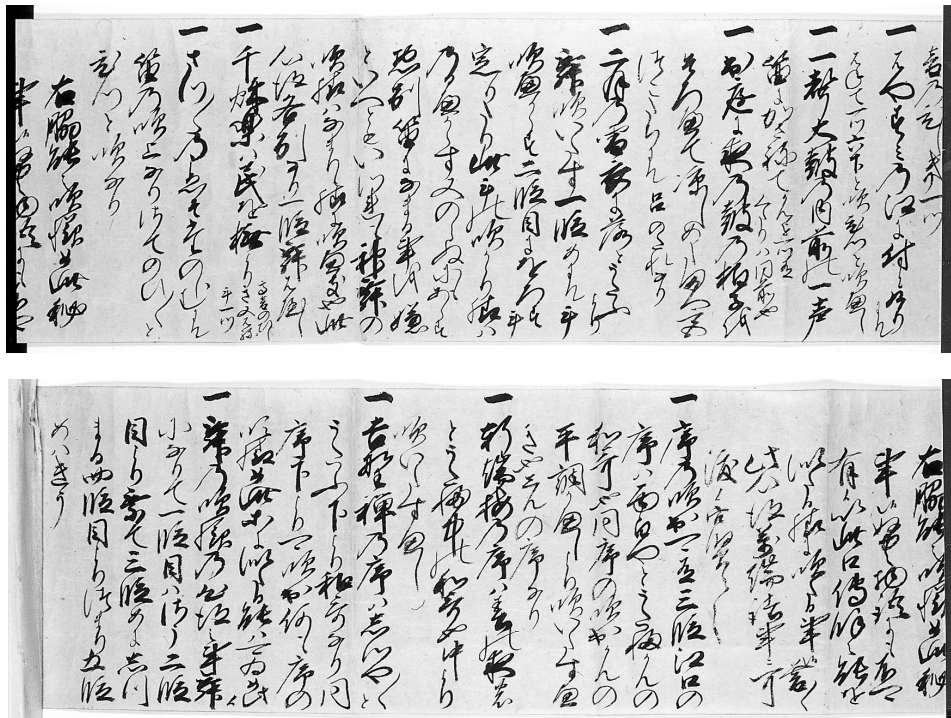


写真2 『笛彦兵衛 【切取不明】 兩人笛之書』（続き）